

さざなみ

# 国語教室

さざなみ国語教室  
 第499号 2023年10月25日  
 発行者代表 吉永幸司  
 連絡先 大津市柳川2-11-5  
 TEL 077-522-1008  
 発行所 滋賀児童文化協会  
 NPO 現代の教育問題研究所

## 無茶ぶり 多賀一郎

最近、よく無茶ぶりの依頼を受ける。  
 「全校生に道徳のような、閉校で心に残るような授業をしてください。」  
 「二年生全体に読み聞かせをして、この教材で国語の授業をしてください。」  
 「また、無茶ぶりされた。」  
 と、迷惑そうなふりをして、笑っている。  
 しかし、本心はとても嬉しい。まず、授業をさせてもらえると  
 いうこと。ともかく授業大好き人間の僕は、子どもたちに授業をさせてもらえるのが幸せで仕方ない。  
 一つの教材をぼんと渡されて、それを授業に落とし込んでいく。顔も知らない子どもたちの姿を想定しながら、授業を仕組んでいく

■「一つの花」の飛び込み授業  
 「一つの花」を授業して下さいと頼まれたときは、さすがに躊躇した。でも、研究主任の「できませんか？」の一言が僕を動かした。  
 一から教材研究をし直した。教材をノートに書き写すことから始めて、徹底的に教材分析をした。十回以上授業をした教材だが、改めて授業を考えて行くと、自分が培ってきた授業力が発揮されていく。この過程が楽しくて仕方ない。  
 クライマックスの授業を僕が実際にすることに決めて、そこに至るまでの七時間の授業は、発問と子どもの反応予想を書いた授業書とワークシートを基に、担任の先生にしてもらう。僕がするのはなく、誰がやってもある程度のと

ころまで子どもたちが到達できるものを作った。  
 そして、八時間目のクライマックスの授業。残りの二時間は、また、続きを担任にもらった。  
 「この授業書は宝物にします。」と担任が言ってくれたのは、嬉しかった。  
 ■道徳の飛び込み授業  
 道徳の授業もときどき頼まれる。  
 今年の帯広での道徳の授業づくりは時間がかかった。夏のほとんどもその教材選定と授業づくりに費やしたくらいだ。  
 教材は、村中李依さんの「こくん」。  
 長期入院していて、退院しても歩行器がないと歩けない幼稚園児が主人公。  
 「こくん」というなずいたら、誰にも手出しさせない強い意志が現れる。  
 そして、その子の思いを理解して、みんなに手出しさせないで見守るように言う友達。  
 幼稚園児なのに、そんなことまで考えられるのかと、深く思わずされてしまう。  
 道徳は教材が命だ。子どもの心に響かないような教材をいくらこねくり回しても、何も深まることはない。  
 子どもたちが真剣に黙る時間が堪らない快感であった。  
 無茶ぶり、これからも大いに期待している。  
 (教育アドバイザー・元日本私立小学校連合国語部全国委員長)

さざなみ

▼滋賀県は教育に熱心な土地である。優しい風光が、そこに住む人たちに学びの心を育てあげたからである。古来、すぐれた学者・教育者を生んできた。思えば、芭蕉も最後の(永遠の)栖を近江に求めたのではなかったか。疲れた心身をいやすだけなく、より新しい境地を求め、琵琶湖畔の朝夕が助けたであろう。まことに滋賀県の先生方は小異を気にせず、協同して互いに切磋する気風に富んでおられる。私の知ることできたのは、いずれも国語の先生方にかざられるが、全国大学国語教育学会滋賀大会での授業と提案にみられるスクラムのみごとさは、鮮やかというほかはなかった(中西和弘先生の言葉)

▼滋賀の文化を支えて下ったのが、『近江の子ども』の編集に全力をあげてたさずわってこられた高野倅生さん。お考えの原点は、子ども言葉に耳を開き、一日一日変わっていく子どもの反応を見逃さない実践を大事にすること

▼「さざなみ国語教室」の月例会では、自分の学級の授業実践、子どもの姿を大事にした研究と実践を交流。提案を受けて各人が経験に照らして可能のかぎりの解決の方法を考える。納得のいかめ時は、質問を重ねる▼そんな実践のただ中から生まれ、そして、続けてきた研究会「さざなみ国語教室」がまもなく500回(通年41年)を迎える。  
 (吉永幸司)

**シンキングツールを活用して  
物語の構造を捉える**  
高木 富也

最近の個人研究として、文学とシンキングツールを掛け合わせることに関心がある。これまで、『モチモチの木』において『ウェビングマップ』を、『こんぎつね』において『ウェビングマップ』と『リーダーチャート』を活用した。二つの実践を通して、曖昧さをはらむ文学の特性と、児童の思考を可視化するシンキングツールの特性、これらを往還することで児童の主體的な交流を生み出すことができた。一定の成果を感じている。一方で、それら以外に効果的な活用ができないのだろうか、ということが課題として見えてきた。

ライマックスで叫びながら死んでいくという展開は、物語の構造を抑えることに適していると言える。しかしながら、構造がわかりやすいが故に、「こう盛り上がりつついったよね。」と理解したつもりで授業が進み、人物の気持ちや行動の変化だけを重視しがちな授業になってしまっているのではないかと考えた。そこで『プロット図』を一枚シートにして、場面ごとの展開と「じんぎ」の行動変化を視覚的に捉えることをねらった。児童は単純なシートに、場面の出来事を一文でまとめながら、人物の様子をメモしていったことで、ライマックスに向かって気持ちがあぐつと上がっている構造に気づいていた。また、山場が終わり第五場面に着地することで、「死んでしまったけれど、みんなから認められたじんぎは幸せだったのではないか。」という終末の良さを考えることができた。

今回の実践を通して、物語の構造を捉えるためにも、シンキングツールを活用することができるということが分かった。シンキングツールは【手段】であるということとを自覚しながら、今後も文学×シンキングツールの可能性を探っていききたい。

参考：黒上・小島・秦山(2019)「シンキングツールを考えることを教えたい」  
(東近江市立能登川南小学校)

**考察を楽しむ  
弓削 裕之**

宮沢賢治『やまなし』(光村六年)の朗読を聞いた子どもたちは、どこか釈然としない表情をしていた。首をかしげている子どもいたので、「わからないところ」にチェックを入れてください」と指示をし、その後クラスで共有した。

- ・ クラムボン ・ 二枚の幻灯
- ・ 青白いほのお ・ もかもか
- ・ ぷかぷか
- ・ 水はサラサラ鳴り ・ 「笑ったよ」笑っていたよ」「殺されたよ」
- ・ 遠眼鏡
- ・ かげ法師 ・ やまなし ・ ラムネ
- ・ 鋼 ・ なめらかな天井
- ・ 白いかげの花びら

これらを考察ポイントとし、自分でテーマを選んで「考察を楽しむ」学習に取り組んだ。「考察」という言葉に、子どもたちの目が輝いた気がした。考察する際の条件は「考えの根拠を書くこと」とし、根拠となりうる資料『イーハトーブの夢』を範読した。

ワークシートにまとめる途中、「本で調べたいことがある」という子がいたので、図書室での調べ活動の時間をとった。インタネット上で調べたいという声もあったが、ネット上は『やまなし』の様々な考察であふれているので、影響を受けないように今回は使用しなかった。

クラムボンとは泡なのではないか。なぜかという、まず、「お魚はなぜああ行ったり来たりする

の。」この言葉から、魚≠クラムボンということが分かります。もう一つ、魚を狙う存在として鳥が登場している。鳥はかわせみであると言っている。鳥≠クラムボンということが分かります。流れる川の中の生命らしきものは微生物くらいだけれど、かにの兄弟に認識できたのかという疑問があります。

他に作中に登場するものと言え、光と泡くらいです。光だとすれば、「笑う」という表現はあまりにも違和感があります。次に泡は、「笑う」という表現もぼこぼこ流れていく様子が笑っているように見えたのかもしれない。しかも、クラムボンは、突然死んでしまふと書いてあるけれど、泡がクラムボンだったら、水面に到達したから消えてしまうことを、かにの兄弟は「死んでしまった」ととらえたのかもしれないと考えました。

この文章を書いた児童は、スラと鉛筆を動かして、ワークシートの裏まで考察を走らせていた。作中の言葉を手掛かりにして、なぜ解きをするような楽しさがあったのだろうか。同じように「クラムボン」泡」と考えている児童がいたが、その子は「イーハトーブの夢」を読んで賢治の人生を知った後、クラムボンが死んだことを賢治の妹の死とつなげて考えるようになった。初めは一人静かに取り組んでいた子どもたちだったが、考察を進める内に自然と意見交流が始まり、「自分の考えを伝えたい」気持ちの広がりを感じた。

(京都女子大学附属小学校)

Sくんと「ごんぎつね」 少徳 信

前回に引き続き、Sくんの学びの姿をお伝えする。とある休み時間、Sくんが不意に話しかけてきた。S「なあ、先生、俺な、思ったことあるねん。」 T「うん、どうしたん。」 S「ごん読んでてな、あれ俺、後悔の話やと思うねん。」 T「後悔ってどういうこと？」 S「兵十がごんを撃ってしまったことなんやけど、俺的にな、それだけじゃないねん。ごんが兵十のうなぎを盗って、おつかあが死んでしまったから、ごんも後悔してるねん。」 T「そうなんか。なかなかさみしい話やなあ。」 S「そんな感じなんよ。そんでな、俺的にさみしいのはな、兵十の後悔もごんの後悔もなんかうまくいってない感じがするところやねん。」 T「うまくいってないって？」 S「なんかな、兵十もごんも後悔はしてるけど、なんかもうどうしようもないって感じ。」 T「とりかえしがつかへんみたいなの？」 S「そうそう。どっちもとりかえしがつかへんから、どんだけ頑張

ってももうどうしようもない」 T「そっかあ。お互いにどうしようもないことを後悔してたんやな。だから読んでてさみしい話に思えるんやな」 S「うん。この話はな、後悔と後悔のすれ違いの話やねん。だからさみしいねん」… この一連の会話から、彼がいかに自分の心に対して素直にごんぎつねと向き合っているかが伝わってきた。彼は「ごんぎつねの言葉を心のフィルターを通して感じ、それが「後悔と後悔のすれ違い」という言葉に形を変えて表れたのだ。兵十とごん、二人の混じり合うことができなかった後悔を心から切なく、悲しく言い表すこの言葉が彼の心の形そのものであり、彼の人となりそのものであると思える。いわゆる「いいこと」を言うとするのではなく、自分の感じたことを感じたまま表現した言葉には、とてつもなく大きな力があることが強く感じられた。子ども達それぞれに、その子どもの見方や考え方があ。他人の言葉ではなく、自分の心に最も寄り添う言葉を選び、その見方や考え方を深め合えたなら、どんなに素晴らしいだろうと思う。Sくんの言葉で、また授業が楽しみなな

(彦根市立高宮小学校)

題名の意味を考える 谷口映介

「一つの花」(東京書籍四年上)の実践を報告する。本教材は、ゆみ子に対する両親の思いが、「一つだけ」というキーワードを軸に人物の行動や言葉として表現され、出来事が展開している。また、「一つの花」という題名が象徴するテーマをめぐって、様々な角度から着目することができるという特性を持っている。そこで、学習者の「問い」を基軸にしながら、「一つ」の意味を考えることができるように授業を構想した。一、「問い」からの授業構想 学習者の「問い」は、大きく四つに分かれた。①ゆみ子の「一つだけ」に関わるもの。②お父さんの「一つだけ」(高い高いする場面)「一つの花」を渡す・見つめる意味 ③お母さんの「一つだけ」④戦争中の生活に関わるものである。④については、写真等の資料で補足する中で解決したが、①②③は、全ての「問い」の一覧を配布し、分類・整理しながら各単位時間を取り上げた。二、「題名」の意味への着目 人物の会話や行動の意味を問う「問い」は比較の出やすいのだが、題名への「問い」は、すんなりとは出ない。そこで題名にある「一つ」を数える活動を取り入れた。その中で、題名への「問い」が生まれた。

C1…先生、「一つ」という言葉は、題名も含めて二個もあったよ！ C2…最後の場面には一つも出てこない。戦争が終わったから？ C3…題名の「一つの花」は、たったの一回だ。「一つだけ」の方が多いのどうしてかな。 下線の部分が、単元を貫いた「問い」となった。左は、第二次の最後に、題名の意味についての話し合いの中で取り上げた際の学習者の後半部分の発話である。前半は、「一つの花は、何を表しているのだろう。」として話し合いを展開した。後半は、思考を揺さぶるために、C3を取り上げた。 T…最初に、「一つ」を数えた時に、「一つだけ」の方が多かったね。では、題名を「一つだけちようだい」などにしてもいいのでは？ C…それは、だめ。それだと、お父さんの思いが伝わらなくなる。 T…お父さんの思いとは？ C…さっきの話し合いで出た、ゆみ子の幸せを願っている思い。「一つの花」には、これがこめられているからかえてはだめ。 C…「一つだけちようだい」はゆみ子の言葉。やっぱりこの話は、お父さんの家族への思いがある。 変えてもよいと主張したのは、一名であった。(たくさんのコスモス)理由はやはりお父さんの思いである。考えを再構築できた時間となった。

(竜王町立竜王小学校)

